

種名	サ ツ キ ツ ツ ジ Rhododendron indicum 					
	分類	被子植物双子葉合弁花類ツツジ科	俗称	サツキツツジ	生活型	低木、半常緑樹
分布	神奈川県・富山県以西の本州、四国、九州(屋久島まで)に分布する。本州中部の太平洋岸に多く、中国地方・九州本土ではごく稀である。					
形態	上流域の河岸の岩上に自生するが、広く栽培され、多数の園芸品種がある。高さ 0.5～1mの半常緑低木で、若枝や葉柄には炎褐色の扁平な剛毛がある。 幹・枝: 幹は低く、枝は分枝して四方へ広がって低く、岩隙に深く根を下ろしているため、激流に洗われても流出するようなことはない。 葉: 葉は互生し、長さ2～3.5 cmの披針形ないし広披針形で先は尖り、質はやや厚く、縁には微鋸歯がある。表面や縁、裏面の脈上に淡褐色の剛毛が散生する。 花・花期は5～6月。枝先の1個の花芽から1～2個の朱赤色または紅紫色の花を開く。花冠は直径3～5cmの漏斗形で5中裂し、上弁には濃い斑点がある。 雄しべは5本で葯は暗紫色、雌しべは1個で、子房には長毛が密生する。 果実: 蒴果は長さ7～10 mmの長卵形で、褐色の剛毛がある。					
類似種	キシツツジは、岡山・島根県以西の中国地方、四国・九州(大分県)の河岸の岩上に生える高さ 0.5～1mの半常緑低木で、東のサツキに対応する。花期は4～5月で、枝先の1個の花芽から新葉とともに1～3個の淡紅紫色の花を開く。葉に春葉と夏葉があり、春葉は長楕円形で長さ3～5 cm、夏葉は狭長楕円形で長さ1.4～4 cmである。 サツキとは花の色が異なるほか、花卉の裂片がサツキでは円形であるのに対し、キシツツジでは広卵形または広楕円形であること、雄しべはサツキの5本に対しキシツツジは 10 本であることなど、相違点は多い。					
生息場所	溪流や上流の河岸の岩や岩盤の傾斜地の間隙で、河岸の水面よりやや高い、普通は直接流水にさらされず、しづきがかかるようなところに生育する。サツキの自生地は非常に雨の多い山間地の半日陰や半日ぐらい陽の当たらない場所で、常に湿度が高い。土壌は岩の割れ目にたまった砂や礫、あるいは礫と落ち葉が堆積したものなどである。サツキは河岸と結びつきが強い植物で、ヤシャゼンマイ、ウラボグサ、ケイリュウタチツボスミレ、ホソバコンギクなどの溪岸植物と一緒に生育する。サツキの生育する群落はサツキ群集としてまとめられる。					
繁殖	4～5月に花が咲き、結実して蒴果の各室の側面が裂開して小さな種子が飛び散る。種子はよく発育する。					
他生物との関係	ツツジハマキホリガの食草である。					
配慮のポイント	生育地の自然の河岸や後背部の樹林を残すことが大切である。花や姿が美しいため乱採集されている。					
トピック	庭木、盆栽、花材などとして利用される。サツキは江戸時代から栽培されており、その品種は 2000 種以上にのぼっている。					
引用文献: 『川の生物図鑑』を改変						

